

〈研究ノート〉

「国産洋服」を博覧する時代

——1933年全日本国産洋服博覧会を例として——

石 田 あゆう

キーワード：博覧会，国産洋服，天皇，流行

○はじめに

博覧会は、西側先進諸国の植民地主義を正当化するために生まれた。そのために、各国が獲得した「世界」の品々を展示することが行われた。一方日本でも19世紀後半から数多くの博覧会が開催されてきた。政府主導ではじめられた日本の博覧会は、欧米諸国に習って社会の近代化をおしすすめることを目的に、常に殖産興業と国民教育の精神が求められてきた。

本稿では、1933（昭和8）年3月20日より4月20日までの32日間開催された全日本国産洋服博覧会について紹介する。入場者数は13万8975人であった¹⁾。それほどの大人数の参加動員があったわけではないが、「洋服」に焦点をあてた日本初の博覧会であったことと、そうした初の催しが大阪で行われたことが特徴的であった。

「洋服」はもともと日本にはない衣服のスタイルであり、西側諸国のもの

1) 寺下勅編『博覧会強記』エクスプラン、1987年、巻末年表参照。

である。本来ならば「西欧」や「異国」の博覧が意識されそうなテーマを掲げながら、その内容は奇妙に日本的であった。開催目的には、洋服の普及や、その利用を人々に勧めることがあったが、単に西欧諸国を礼賛したわけではなく、また、その模倣を卑屈に擁護したわけではない。さらに博覧会ながら、その主催者となったのが国内の洋服産業組合を中心とする民間の組織による催しであったことも特徴的である。しかし民間主導の博覧会ながら、日本での洋服導入の歴史的事情を反映し、「洋服」を象徴として、日本らしさとは何かを人々に考えさせるイベントとなっていた。

資料として、この博覧会を記念して1933年に出版された大阪洋服商同業組合『全日本国産洋服博覧会・日本全国洋服商大会記念誌』（以後『大会誌』）を参照した。日本において最初で最後、「洋服」をテーマに大阪で開催されたこの博覧会が、日本にとってどのような社会的意味を持った催しだったのかを概観する。

1. 国産品愛用の気運と博覧会

まず、1933年開催の全日本国産洋服博覧会開催時の社会状況について述べておこう。『大会誌』には次のように記されている。

「本会は全日本国産洋服博覧会と称し我国に於ける洋服発達の歴史及び斯界の現状を紹介し以て民衆の国産洋服に関する認識を更新し国産品の愛用普及を謀ることを目的とす」²⁾

「国産洋服」とは奇妙な言い回しであるが、これは日本人による日本産の洋服を指し、舶来品のものと区別されてきた。当然のことながら、それには洋服としては劣ったもの、粗悪品というイメージがつきまどってきた。この

2) 大阪洋服商同業組合『全日本国産洋服博覧会・日本全国洋服商大会記念誌』、1933年、36頁、原文はカタカナ。旧字は常用漢字に改めた。

博覧会は、国民の中にあるそうした国産洋服のイメージを転換し、洋服を仕立てるための生地から製法まで日本国内でまかなうことを目指す教育的催しであった。

主催したのは、大阪洋服商同業組合である。後援者には商工省、大阪府、大阪市、大阪商工会議所、そして大阪陸軍被服支廠が名を連ねた。大阪を中心とした催しだったわけだが、一方で、全国各地の同業組合が協賛しており、日本中の洋服業界への影響力も持った。

この博覧会は、何より洋服だけを専門に開催された初めての催しだった。確かに博覧会において衣服の展示が行われることは多く、内容としては目新しいものではない。一方で、展覧会として、被服関係の催しはたびたび開催されていた。それをあえて洋服のみをテーマとして掲げ、催しを博覧会規模にまで高めたことはこれまでにない試みであった。

まず開催経緯においては次の点が重要である。洋服の歴史を「博覧」とするという啓蒙的・文化的側面を建前として掲げたイベントであったが、この博覧会が企画、開催された理由として、次のような社会的事情が存在した。国内の洋服業界の圧倒的な不振である。もちろんそれは、経済界全体の不振であった。1929年、世界的恐慌の余波が日本をおそい、金輸出禁止による急激なる消費経済界の萎微縮小があった。洋服に携わる各地の同業者は不振衰退傾向にあり、業界全体の厚生開発が求められていた。

そこで、国民への国産品使用の呼びかけが行われ、国内での需要を高め国産品の消費を促そうと考えられた。洋式の生活を営むために必要な商品の数々は、国内で模造品が作られてはいても、「ホンモノ」の舶来品を偏重する傾向があった。舶来品輸入への厳しい処置がとられたことで、業界としては「国家経済上の痛恨事」とも呼べる大きな痛手を負った。そのためには、国産用品の品質向上が必要であった。『大会誌』の巻頭には、そうした事情を反映して組合総裁の当時の大阪府知事、縣忍（あがたしのぶ）の題字「国産振興」が飾られた。

また当時は生活合理化運動が展開された時代でもある。洋服をはじめとして、欧米の生活様式が模倣される一方、和服と畳の生活も併存し、和式洋式の二重のライフスタイルがあった。こうした衣服生活のダブルスタンダードが不経済であると批判の対象になっていた。生活合理化運動の過程で、こうした二重生活をまず衣服から解消していくことが人々には求められつつあった。こうして、外国品及び外国業者の技術・生産に匹敵する国産愛用の要請が高まることになった。博覧会は、こうした社会状況を払拭するきっかけとなると考えられた。

「勇気と物質的犠牲を払つても猶邦家の為、洋服発達の貴き歴史と国産品尊重の重大性とを、一般民衆に能く知らしめ、以て其の認識を更新するの必要を痛感せる結果、爰（ココ）に此の重責を果すべく、我邦産業経済の大中枢都市たる当大阪に於て其実力を誇る我大阪洋服商同業組合即偉大且崇高なる使命を自負し経済報国の責を尽さんとするものである」³⁾

大衆に対する洋服知識の啓蒙と、その上で国産洋服へのイメージ向上を目指して、博覧会の展示物は吟味された。だが、いたずらに斬新と華美に走る大衆的傾向には警鐘が鳴らされていた。和服では柄や素材が流行の要素になるが、洋服においてはそのスタイルが重要になる。毎年デザインが大きく変化し、それが共有されることが流行を生み出していくことが今日では広く知られているが、当時、それは「国家的観念乃至事業道德」より看過できない事態ととらえられた。先に述べたように、国産洋服の普及は、二重生活の解消、生活合理化のために必要な事業と見なされていたからである。洋服の普及が、衣服をめぐるさらなる消費を促すことがあってはならないと考えられた。「時代を遅れ」を人為的に作り出し、流行を追うための購入が次の衣

3) 同『大会誌』37頁

服需要を生むとの認識は、当時の業界ではあまり重要視されていなかったことがわかる。

＜二極化する洋服という象徴＞

世間での評判を新聞報道から見てみよう。1933年3月21日『大阪朝日新聞』がいち早くこの博覧会について報じた。「全日本国産洋服博——史的参考品も並べて 貿易館と天守閣で」として、以下のように開催内容を紹介している。

服飾の春ひらく？——大阪洋服商同業組合が力瘤を入れてゐる全日本国産洋服博覧会は商工省、大阪府、市、商工会議所等々後援で二十日午前九時から府立貿易館と大阪城天守閣で花々しく蓋を開けた。

第一会場の貿易館には本館をはじめ中央南両館および左右の商品館に、遠くは樺太台湾、全国各地の洋服屋さんから出品した背広、モーニング、合オーバなどの製品、各種の服地類をはじめ、参考品として明治大帝御召しのフロックコート、御乗馬ズボン、大正天皇のオーバ、フロックコート、満州国政府出品の洋服類、故後藤伯のボーイ・スカウト制服など、また第二会場の天守閣には宮内省からの舎人、主馬寮、御裾奉持者などの服装、陸軍省からの世界各国の洋服および明治初年洋服が始めてわが国で行はれた当時の、マンテル（上衣）ダンブクロ（ズボン）等の珍奇なものまで総計約五千点第一会場では既製服の原価即売も行ふはず。

まず会場に選ばれた貿易館と天守閣とは、第一会場の大阪府立貿易館、第二会場となった大阪城天守閣のことである。会場使用願いに添付された書類「全日本国産洋服博覧会目論見書」のなかの「開設ノ趣旨」には次のようにつづられている。

「明治大正昭和三代に於ける洋服変遷の事実並に発達の現状を展示公開し大衆批判

の参考に供し以て本邦洋服界の現在か如何なる水準に達しつつあるかを知らしむる」⁴⁾

「明治大正昭和」の時代の流れは、単に時代ごと洋服の展示によるものではなかった。それは、それぞれの時代の天皇の衣服が象徴した。皇室関係者をはじめ、著名人の身につけた衣服を見ることが重要であった。衣服の展示によって日本の近代を学ばせるという、博覧会らしく人々への啓蒙的機能を果たしていたことがこの新聞記事からはうかがえる。

日本における洋服発達の歴史を知ることと国産愛用を目的とするこの博覧会を権威付けたのが、天皇という記号であった。洋服の博覧会が「天皇」という象徴を必要としたのは、日本の近代化と天皇の果たしてきた社会的役割を考えれば、非常に理にかなっていた。

1871（明治4）年9月4日の明治天皇勅諭において、宮中側近・臣下たちにして「平生心して洋服を用ひよ」との呼びかけが行われた。この事実をもって、洋服博覧会としては初めての催しながら、開催されるだけの歴史的根拠を有することになった。「畏くも明治大帝、大正天皇の御料服を始め奉り内外武官の正服等も陳列さる」(『中外毛織洋服新聞』1933年4月15日)と大々的に報じられていたように、日本的伝統を共有するためのイベントとして世間では位置づけられたのである。

そもそも「洋服」は、近代日本国家イデオロギーの象徴だった。そして日本の近代化と天皇の洋装化は密接な結びつきがあった。多木浩二によれば、1872（明治5）年の正月、軍事操練において、天皇は操練用の洋服を着用した。天皇の操練服は、冬は紺色のボタン掛け、夏は白色のホック掛けであった。陸、海軍ともに洋式の軍服が制定され、ついで同年5月、近畿、中国、四国、九州巡幸に旅立つにあたって天皇が人前にあらわれたときには、もう

4) 同『大会誌』149頁

燕尾形ホック掛けの正服、舟形の帽子を着用して正式に洋装に切りかわっていく⁵⁾。

天皇の衣装の洋化こそが、日本における近代社会の象徴だった。つまり、日本が近代国家であることを内外に指し示すために、その元首である明治天皇の洋装姿が必要不可欠だったのである。さらに富国強兵が掲げられた日本では、その洋服とはまず何よりも軍服姿である必要があった。

ただ昭和の時代を反映して、日本の近代化の正統性を重々しく顕示する一方、オンナ・コドモ服の華やかな展示もあったという。すでに大阪では1932年3月、心斎橋にカネボー・サービス・ステーションが開店し、日本を代表するデザイナーの田中千代が、そのカネボウ社長の夫人である武藤千世子の依頼を受け、ショーウィンドーの展示を請負っている。さらに翌年には、阪急百貨店・小林一三社長の要請で、婦人服部の初代デザイナーとなった時代である。1931年の満州事変以後の時代を「十五年戦争」と呼ぶことがあるが、1941年の真珠湾攻撃から、日本各地が空襲で焼け野原になるようになる時期は例外として、1930年代の婦人雑誌では洋装のモデルが巻頭グラビアを飾るようになっていた。実際、女性が生活のなかで洋服を選択するようになるのは戦後のことである。だが、当時の大阪都市生活者にとって、女性の洋服姿は身近なものであったと考えられる。

『東洋毛織新聞』1933年4月13日臨時号は、この博覧会をそうしたシーンを彷彿とさせる展示があったことを次のように紹介している。

1933年の洋服の中心を往くこの高等洋服類は 云ふ迄もなく選り抜きの業者が我こそ日本一とばかりに腕に撚をかけて 最高最善の技術的作品だけに見た者を感嘆せしめねばおかなもの、スタイルから色柄の選び方までこれこそ現代人の洋服中心サンプルである その南側は婦人子供服とその参考品で、流行もスタイルも突端的

5) 多木浩二『天皇の肖像』岩波現代文庫、2002年参照

なテンポをもつてゐる婦人子供服の陳列は色彩的にも技術的にも人目を惹いて異彩を放つてゐるが 萬花紅一点とも云ふべき賑やかで華やかな存在であろう。

日本の近代化を学ぶという教育的要素から抜け落ちる洋服の展示、つまり消費欲望の喚起、流行商品としての「洋服」に人々を誘う展示があったことを感じさせる記事である。とはいえ、それは例外的展示であり、この博覧会は、人々のなかにある舶来品偏重の社会的盲信を打破すること、そして、洋服での生活は消費経済における合理的精神を養うことが目指されていた。それは、「国産」愛用の精神を鼓舞することをもって改善される。

国産意識は、「満州・樺太・台湾」も含め、明治からつづく日本の「洋服」を博覧することで育まれる。博覧会の普遍的テーマ、「殖産興業」と「国民教育」と、日本の植民地主義の正当化が接合されていた。「明治大正昭和三代」の天皇に象徴される日本での洋服の変化を展示することは、時代を反映した社会状況や変化の過程を博覧するにとどまらない。日本の近代化の合理的過程を指し示すためのものだった。

そのため、斬新と華美に走る大衆の傾向を批判し、指導し改善を促す目的がこの洋服博覧会にはあった。だが、洋服への人々の関心を流行の要素をすべて排した形式で開催することは難しかったとも考えられる。こうした、洋服をめぐる二極化する状況が存在していた。「色彩的にも技術的にも人目を惹」いた婦人子供服は、洋服博覧会においては周縁的展示として「異彩」を放った。

<博覧会開催効果>

主催者側は、博覧会の開催効果として、次の二点を上げていた。

第一に、「形式的宣伝に依る精神上の効果」である。何より一般の人々に対して、服装に対する注意を促し、かつ洋服に関する自省心を誘発し、「国産品に対する愛用精神の培養を誘導した事」である。それと同時に業界内に

対し、「非常時局に処する自力更生心を醸成せしめた事」も宣伝効果として指摘されていた。外国製品に頼らず、国内製品の需要拡大が急務となり、そのためには、国内製品の品質を保証し、購買者の信頼を勝ち取る必要があった。「非常時局」とは、1931年の満州事変以後、国内の経済統制が厳しくなったことを意味するのではなく、洋服業界にも、国産洋服重視への意識の転換が生じたことをそのように呼んだのである。

そして第二の「実質的宣伝に依る観念上の効果」として、この博覧会の文化的意義が強調された。つまり、各種展示により、日本における洋服発達の事実及び其の春秋に富む変遷過程を、入場者に知らしめることが出来たことである。

「今更乍ら能く之が史実の貴さを覚らしめた事、猶国民常拭くとしての水準範囲を凌駕する事遥かに幾優秀なる、各種現代洋服の美観偉貌と思ひ較べて、国産信頼の総念を高調し、其の愛用心を鼓舞した事。」⁶⁾

元治・慶応のころ、つまり幕末に軍隊への洋服導入にはじまって、日本に洋服業の誕生をみて以来、60有余年の変遷を展示することで、洋服と日本人との結びつきの歴史は不自然なものではないと示されている。その歴史を知ることが、国産品への信頼を高めることを可能にするとして、洋服に特化した初めての博覧会としての意義が強調された。

1933年4月15日『日本羅紗新聞』は「燦たり博覧会風景 明治・大正・昭和の生きた洋服発達史」と紹介している。そして、その発展してきた経緯を振り返ることが、これからの業界と社会に有益な開催であったとされた。

6) 同『大会誌』48頁

2. 日本全国洋服商大会に資する博覧会

全日本洋服博覧会開催期間中、4月15・16日には日本全国洋服商大会が併せて挙行されている。日本全国洋服商は博覧会の開催母体であり、「全国各地所在の洋服商代表を以て之を組織」していた。この博覧会期間中に行われた日本全国洋服商大会では、綱領及宣言並に各種の提出議案を審議決定し、以下の内容を採択した。

- 1) 国民被服の改善統一を計り洋服普及を宣伝する事
- 2) 技術を錬磨し材料を厳選し製品の向上を期する事
- 3) 商取引を改善し且生産の経済化を達成する事

博覧会は、単に洋服の展示のみで終わったわけではなかった。洋服についての対面教育を行い、その技術向上を目指した。公開供覧による指導という直接的教育は、「各種特惠常識を獲得せしめ」た。上記の三点の達成のために決議された具体的事項の数々を列挙すると次のようになる。

- ・既成洋服の寸法規格を統一し全国普及を期す
- ・毛織物消費税の撤廃を関係当局に請願す
- ・洋服名称の改正を考究す
- ・官営洋服事業の民業移譲を政府当局に請願す
- ・国産羅紗検査制の全国施行を政府に要望す
- ・刑務所の洋服業圧迫に対し之か阻止運動をなす
- ・国防費の献金募集を計る
- ・郵便法第二章第八節集金郵便規則中改正意見を当局に陳情す

以上が、当時の洋服業界の大きな関心事、問題事項であった。まず、洋服

が官営主導の事業であり、民間への権利移譲が望まれていたことがうかがえる。さらにいかに洋服を規格化し統一していくか、つまり無駄を排すため、デザインの画一化が目指されていたこと、そして、国防費への貢献など、現在とは異なる社会的文脈のなかに「洋服」は存在していたことがうかがえよう。つまり、国産愛用をすすめる、業界の振興には洋服の規格化と画一化が有効だと考えられていたわけである。

当然のことながら、この洋服組合の役員、相談役、常任委員をはじめとする各種委員には女性はまったくいない。ジェンダー論の観点からいえば、博覧会という公的領域において展示される「洋服」とは、圧倒的に男性のものであった。つまりこの洋服博覧会の開催は、被服改善、国産奨励、国家事業の一環として存在しており、洋服業界はそのために「寸法規格を統一」していくことで、その全国普及は進むと考えていた。先の決議事項の数々からうかがえるように、洋服業界は、国産愛用の精神高揚から、すでに戦時における生活合理化への道を歩み出していたともいえる。

1931年の満州事変以後、日本は「非常時」に入っていたとはいえ、国内での生活用品をはじめとする物質的な統制が行われるようになるのは、1937年の日中戦争突入以後のことである。その後1年間にわたる応急措置段階を過ぎて、戦時統制の根本法規となる国家総動員法が1938年5月に施行され、つづいて改訂物資動員計画の実施（同6月）、生産力拡充四ヵ年計画の発表（1939年1月）、物価統制大綱の決定（同4月）、労務動員計画の決定（同7月）、総動員法の広範な発動を経て、広く物価・労働・貿易・為替・資金・物資・利潤などの統制が行なわれていくことになる。

しかし、洋服業界ではいち早く自主的に洋服の規格化・画一化をすすめる動きが本格化していたのである。

<組合の歴史的伝統>

博覧会の後援者に商工省や大阪陸軍被服支廠が名を連ねていたとはいえ、

民間業者の集まりにおいて、洋服の規格化を目指す動きが大阪において生じていたことが興味深い。大阪でそうした機運がたかまった理由を、博覧会開催の中心的担い手である大阪洋服商同業組合の歴史に探ってみよう。

第一会場は大阪府立貿易館、第二会場は大阪城内天守閣で開催されていたが、両場所ともに大阪における象徴的場所であった。第一会場の「貿易館」は1890年創立だが、1918（大正7）年3月、大阪府知事の大久保利武の計画により、大阪市の貿易助長機関として整備され、欧米商品の陳列所、各種博物館組織に準じて設立された。当初は「大阪商品陳列所」と称したが、1930年1月1日より「貿易館」となり、全国でも有名な商工業助長機関として知られていた。何より1929年6月6日、1932年11月16日には「天覧」があり、「光栄の地所」が第一会場に選ばれた。第二会場の大阪城は、いわずともしれた大阪市の「名勝中の最冠」である。1931年6月には大阪市が戊辰戦争で失われた天守閣を再建し、1932年11月にはやはり昭和天皇が訪れた場所だった。

また組合はこの博覧会は、1903（明治36）年に大阪の天王寺での第五回内国勧業博覧会の「30年記念事業」として位置づけていた。第五回内国勧業博覧会は、日本で初めて行われた万国博覧会として位置づけられており、博覧会跡地は天王寺公園や新世界ルナパークとして長らく大阪の名所となったことは有名である。

そして大阪洋服商同業組合はかつて大阪洋服商工業組合と称し、第五回内国勧業博覧会が天王寺で開催されたことを機会として、第一回全日本洋服業大会を挙行した歴史を持っていた。こうした大会が当時開催されたことは、東日本における東京洋服商工組合への対抗の意図が込められていたが、その精神は、大阪で行う博覧会を支えた組織としての自負となって長らく存在した。

その後、1906（明治39）年には、当時の農商務大臣・松岡康毅の認可を得て公法団体としての資格を取得し、翌年4月には第一回全国洋服共進会を開

催、その後、1920（大正9）年10月12日から11月19日にかけて、第二回全国洋服共進会を開催している。

1929年10月には会期6日（10月10日から10月15日）でレディーメイド洋服共進会、またすでにそれまでも徒弟の裁縫競技会を6回開催、昭和6年に9月には、羅紗製品洋服卸大見本市の開催を行っており、多くの組合事業を展開してきた。

共進会も産物や製品の陳列を内容とするが、博覧会とは異なり、主たる目的は互いに出品物の優劣を競い合うところにあった。出品物に対する審査、批評、表彰が特色となっている。中小ないし零細企業において、その業種に属する産物や製品について競争し、業界全体の進歩をはかることを目的とした。

だが、組合としては、数々の催しを主催しながら、あくまでも共進会どまりで、博覧会に至らなかったことが長らく懸案事項となっていた。「遺憾乍ら、是れ迄に再々博覧会開催の機会はあるも、猶之が実現を見る迄に至らずして、雄図空しく幾年かは過ぎて来たことを特筆する。」⁷⁾と『大会誌』には記載されている。大阪を中心とするこの組合として、博覧会の開催を行おうとしており、何度となく協議事項にあがっていた。実際の開催より5年前の1928年初春に、洋装博覧会の試案が台頭し、合同協議会で提案されたことがあった。しかしこれも実現せずに終わっている。

そんな状況にあって、一転、博覧会開催への道が開かれる機会が訪れた。1932年1月、天皇が和河泉三州の地で行った陸軍特別大演習である。昭和天皇が「大阪御駐輦」のみぎり、産業を奨励するために各地を視察するという噂が聞こえ、大阪府下を中心として、各関係者に感激を呼び起こしたという。そこで、これまで画餅に帰してきた博覧会事業の敢行が決断されたと『大会誌』は記している。こうして洋服博覧会は、「聖上陛下御駐輦の機の記念」

7) 同『大会誌』75頁

として開催することが決定された。天皇という象徴を得たことで開催に弾みがついた。

ただ、皇室関連行事を記念する博覧会の開催は、この洋服博覧会に限ったことではない。1928年（昭和3年）、昭和へと元号が変わってから全国各地で天皇の即位を奉祝記念する博覧会が開催されるようになり、“博覧会ブーム”を巻き起こしていたからである。

天皇という象徴を得ることで開催に弾みがついた洋服博覧会とはいえ、こうした博覧会ブームがあったからこそ、実質的内容を充実させることができた側面もある。洋服博覧会直前に開催された万国婦人子供博覧会や商工省主催包装品展覧会等、日本的博覧会の開催経験が蓄積されてきており、各規約、会則、諸規定がすでに整えられていたからである。それに基づいて、同組合第二部主催羅紗製品卸見本市における各申し合わせ事項を引きつぎ、そしてこれらをふまえたうえで、特殊博覧会に必要な部分が採用された。民間主催の一催しでありながら、博覧会として開催できたのも、こうした基盤があったのであった。

こうしてこの大阪での博覧会には、洋服の東西両組合はもとより、六大都市の各洋服商工組合、九州、北海道における二大連合会、朝鮮、大連における二大組合、そして大阪羅紗商組合等が協賛することとなった。時代は「大大阪」期であったとはいえ、中央からは離れた博覧会でありながら、業界全体の後援を受けた全国規模での一大イベントとなったのである。

3. 展示される儀礼としての洋服

博覧会事業の重要部分となる「歴史参考品」の貸し出しに関しては、大きな苦労が伴っていた。展示品となる参考品の「貸下願」についても、以下の方面に願書を提出し、参考品の借り入れ運動が行われた。

・宮内庁

- ・陸軍省
- ・海軍省
- ・逓信省
- ・鉄道省
- ・内務省
- ・陸軍被服本支廠
- ・各海軍鎮守府
- ・朝鮮総督府
- ・関東庁
- ・満州国政府
- ・大阪税関
- ・大阪府警察部
- ・大阪鉄道局
- ・三府四十三県
- ・北海道
- ・樺太
- ・台湾各庁商工課長殿
- ・陸海兵学校
- ・日本郵船株式会社
- ・大阪商船株式会社

展示品の貸し下げ先からは、どのような洋服が求められたのかが浮かび上がってこよう。つまり、正装服、軍服、制服、そして日本周縁地域の衣服である。この洋服博覧会の協賛者には大阪陸軍被服支廠が名を連ねており、博覧会事業の成果として次のような期待を寄せていた。

近時軍民被服の統一、公私経済の合理化等が叫ばれてゐる今日、殊更に被服に関

係深き本廠の後援を得て、当時博覧会事業の成果に大を為さんとするもの、亦宜なる哉と云はざるを得ない所であらう⁸⁾。

「公私経済」の合理化を推し進めるための、「軍民被服の統一」の可能性が探られていたことが見て取れる。1940年代に入ってから日本では、陸軍の軍服に準じた立折襟仕立ての服が、民間の男性が着用する「国民服」として普及する（1940年）。戦後もしばらくの間は、新しい服を買う余裕がなくこれを引き続き着用した人が多かった。こうした衣服統制の可能性を探る動きがすでに生じており、国産洋服愛用を進める民間洋服組合の思惑と一致していた。民間業界でも国産洋服の大量生産には、軍服や制服をはじめとする統一規格の洋服の受注が最も合理的だった。実際、各官衙公署並びに主要会社への依頼が行われた。

また民間諸家としては次の名が掲載されていた。各地知名の所蔵家有力者に対し「御貸下願」が送られている。

- ・大山公爵家
- ・後藤伯爵家
- ・大隈侯爵家
- ・住友男爵家
- ・鴻池男爵家

宮内庁をはじめ、各種省庁、陸海軍、財閥、政治家たちの「洋服」やそれにつわる品々が、日本の歴史を象徴したことは先に述べた通りである。それと同時に、草の根レベルで全国の関連をつけ、「日本」での博覧会であるといメージさせるのに役立ったのが、全国各地に行われた展示作品出展の呼

8) 同『大会誌』124頁

びかけであった。作品には、名誉賞、有効賞、進歩賞など、優秀作品には賞状を授与した。出品作品を紹介しておこう。

- 第一部 高等洋服類
- 第二部 既成洋服類
- 第三部 子供及婦人服類
- 第四部 毛織物及服地類
- 第五部 服装雑貨及付属品類其他
- 第六部 参考品類

第一部の高等洋服類というのは、燕尾服やタキシードなどの礼服、軍服、制服等である。そのうち302点が受賞した。最も多かったのは背広服（135：ゴルフ服を含むとある）、続いて略式礼服・モーニング（111点）であった。

第二部、第三部は併せて206点の受賞があり、こちらで多かったのも背広服（66点）、そしてオーバーコート（42点）であった。ちなみに婦人服（訪問衣）で受賞したものは10点のみであり、この博覧会の主眼の有り様が見て取れる。当時の「洋服」といえば、圧倒的に礼服、軍服、制服、つまり男性を中心とする職業と直結する衣服のことであった。しかし西日本、特に大阪の出品者には次の傾向があったという。

「特権，特殊階級の専用服と言ふよりも，寧ろ一般大衆向乃至婦人子供向高級普通服の生産，普及を目標とし，其製造技術に嶄然たる得意と自信を持ってゐるのではあるまいかと言ふ特色が窺はれる事」⁹⁾

つづいて第四部、第五部では各種洋服生地や、材料となる素材の展示であっ

9) 同『大会誌』363-364頁

た。その多種多様な品々の出品と、工芸品の発達動向、洋服の美術化進歩が指摘され、そのような動向から、時代は婦人子供向の市場が開かれつつあることが意識されていたようである。この博覧会の時代には、博覧会の主たる展示は、歴史や礼節、職務を重んじる「洋服」を博覧することにあったことは明白だったが、そうした規格化画一化を良しとする「洋服」とは異なるバリエーション豊かな「洋服」の出現が意識されていたといえるだろう。スタイルの豊かさが優先される女性の洋服の普及は、結果的に戦後の現象である。しかしその予兆をこの博覧会ですでに見ることができたことをうかがわせた。

第六部は、この展覧会の肝となる、歴史をたどるための参考資料となるような洋服が集められていた。この展示の目的は（１）儀礼時服装に関する常識の涵養としての好資料であること、（２）階級組織の認識を明確ならしめ且つ規律意識の肅正を期すこと、（３）時代と服装の関係を認知することの三点であった。

洋服とはあくまでも公的意識を顕示する衣服であり、洋服のこうした社会的機能がこの博覧会の正当性を高めていたことは間違いない。ただ、洋服をめぐって相反する要素が矛盾をはらみながら共存し、博覧されていた時代であったところに、この博覧会の独自性を見出すことができるように思われる。

○おわりに

日本初の洋服博覧会とは、国産洋服愛用と合理化の精神、日本の歴史と社会の伝統を「洋服」を通じて学ぶという教育的要素の強いものであった。

現代からすれば、「洋服博覧会」などと聞けば、女性中心の洋服やファッションをはじめ、きらびやかな流行服との関係をイメージしてしまうが、それとは大きく異なる内容をもっていたことがうかがえる。そもそも洋服を「博覧」し、それが象徴する文化を学ぶことは、現代の日常での洋服感覚にはそぐわない。博覧されるのは、時代の象徴か文化的価値ある衣服に限られ

よう。しかし当時は、日常生活における衣服改善、日常の洋服普及のために博覧会は利用されていたといえる。

この博覧会は、1920年代後半から30年代前半におとずれた日本の洋服業界の危機と、それを乗り越えるために「国産洋服」を奨励することに最大の目的があった。それによって、業界の発展を歴史的に顕示し、これからの発展を目指す方策としてのイベントであった。その正統性を保証するうえで「天皇」という記号を最大限に利用し、民間の洋服組合主導で洋服をテーマに博覧会を開くことに成功したのであった。

洋服によって日本の伝統を示し、日本の近代化を象徴させる博覧会である一方で、洋服のスタイルの美しさに魅惑された人々による流行的要素も会場には存在した。婦人服の展示に魅了される女学生の次のような作文がある。

「やっぱり私たちは男の方の洋服地より婦人服地の方に気を取られ勝…Kさんと二人であの地をスカートにあれをハーフコートになぞ話してゐたら皆さんにおくれてしまつて驚いておひかける。可愛い色々のマネキンに着せられた小供（ママ）服や婦人服をみてゐると「此の夏はあんな衿に作つて見ようかしら…」なぞとて一所をはなれにくい」¹⁰⁾

『大会誌』にはこうした博覧会を見学した生徒たちの感想がいくつか掲載されている。もちろん明治天皇や大正天皇のコートなどを見て、奢侈にながれず、国産品への関心を高めてもいるが、今となってみれば、この女学生の感覚こそ、つまり「洋服」に向けられる視線としてはこちらが戦後は主流となっていくことになる。敗戦によって家庭内での洋裁普及と、軍服不要の時代が到来する。日本人にとっての「洋服」といったテーマを博覧会という場に持ち込むには、近代天皇制や軍部の歴史との関係を見無視できないため、戦

10) 同『大会誌』382-383頁。中大江家政女学校4年生・瀬古和子「全日本国産洋服博覧会を見る」

後の社会状況のなかではテーマ設定が困難となろう。

余談ではあるが、明治4年に勅諭が發布され、明治5年11月12日付で「爾今礼服には洋服を採用す」という太政官布告令が出されたことを受けて、現在、11月12日は「洋服記念日」となっている。大阪ではなく、明治19年に設立された東京都洋服商工協同組合が、昭和4年にこの日を「洋服記念日」として制定したことによるものだが、現在も、注文洋服業者たちを中心とするこの組合は、昭和4年11月12日以来、和服から洋服への採用を決断された明治天皇の御遺徳を崇敬し、毎年11月12日に明治神宮へ参拝し、明治神宮参集殿において記念式典を挙行しているという¹¹⁾。限られた業界のイベントとしてその歴史はまったく消えてしまったわけではないようだ。

しかしながらこうした「洋服」をテーマとして日本の近代の歴史を語り、確かな裁縫技術の向上と統一されたデザインの伝授を目指す博覧会は後にも先にもこの一度限りのこととなった。

日本の洋服普及と天皇制の関係が明白であり、非常時でありながら国内はまだ戦禍に見舞われてはおらず、それでいて女性たちがまだ洋服スタイルを遊ぶ手法を手にしはじめたばかりの時代、そうした1933年を象徴するイベントとして「全日本国産洋服博覧会」は存在したといえるだろう。

11) 同じ11月12日ではあるが、これとは別に、全日本洋服協同組合連合会が1972年に制定している。